

TOYAMA VICTIM SUPPORT CENTER



公益社団法人

とやま被害者支援センターだより

2018.12.27 発行 第29号

被害者支援活動の推進について

富山県警察本部長 山田 知裕



富山県警察本部長の山田知裕でございます。

とやま被害者支援センターの皆様方には、平素より相談対応を始め、裁判所・検察庁への付き添いや自宅訪問といった直接的支援等、犯罪被害者やその家族・遺族への様々な支援活動に献身的に取り組んでいただいており、心から敬意を表するとともに深く感謝申し上げます。

さて、最近の被害者支援活動の現状をみてみると、平成28年4月に閣議決定された第3次犯罪被害者等基本計画に基づき、犯罪被害者に対するさまざまな取組みが行われており、当県におきましても、昨年4月に「富山県犯罪被害者等支援条例」が制定され、本年3月には「性暴力被害ワンストップ支援センターとやま」が開設されるなど被害者に対する支援活動が進められています。

そうしたなか、県内唯一の「犯罪被害者等早期援助団体」に指定されているとやま被害者支援センターは、関係機関・団体等と連携し、犯罪被害者やその家族・遺族の心情に配意しながら、これまで数多くの直接的支援や被害者自助グループへの支援活動、犯罪被害者の現状等を社会に周知させるための広報啓発活動など、様々な事業を通して犯罪被害者等の方々に再び平穏な生活を取り戻すため、きめ細やかな被害者支援に日夜取組んでおられます。

去る6月26日、富山市内で発生した奥田交番襲撃事件の発生の際にも、小学校児童の保護者等に対する心のケアとして、発生直後に、相談を受け付ける案内書や精神的なダメージ対応のパンフレットを児童の保護者や地域住民に配布するなど、常に被害者の支援に目をむけ、被害者目線での活動を推進されています。

今後もこれまでと同じく、犯罪被害者に寄り添い、途切れることなく、犯罪被害者のニーズに即したきめ細やかな支援活動を推進して頂きますとともに、被害者も加害者も出さない安全・安心な地域社会のため、被害者支援意識の高揚を図って頂きたいと思います。

県警察におきましても、犯罪被害者等に対する精神的被害や経済的負担の軽減に向けた取り組みを進めていますが、近年の犯罪被害者等の多様なニーズに対応していくためには、富山県犯罪被害者等支援協議会が中心となって犯罪被害者の心情に配意した支援活動の充実を図っていく必要があると考えております。

今後とも、とやま被害者支援センターをはじめとする関係機関・団体の皆様との連携を取りながらより一層きめ細やかな被害者支援活動を推進したいと考えておりますので、格別のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、とやま被害者支援センターの益々のご発展と会員及び関係者の皆様方のご健勝・ご多幸をお祈り申し上げます。

平成30年度犯罪被害者週間行事 「講演会＆コンサート」報告

平成30年度犯罪被害者週間に併せ、当センターは12月1日、富山市のタワー111スカイホールで「講演会＆コンサート」を開催しました。一般市民や関係者約230人が参加しました。

はじめに、四十物直之当センター理事長が挨拶し、「当センターは平成18年の発足以来、犯罪被害者の早期援助団体指定や公益社団法人認定など、一歩ずつ支援の拡充に努めてきました。今後も関係機関・団体のみなさんとの協力で被害者支援に取り組みたい。」と述べました。続いて来賓の成富則宏富山県警察本部警務部長が「いっそう被害者に寄り添い、とやま被害者支援センターなどの関係団体とともにニーズに即した支援を推進してまいりたい。」と述べられました。



被害者支援推進の決意を新たにした
「講演会＆コンサート」

第1部

理事長挨拶

当センターは、本年で13年目を迎えることができました。この間、富山県公安委員会より「犯罪被害者等早期援助団体」の指定を、さらには富山県知事から「公益社団法人」の認定を受け、犯罪被害者支援の推進に大きな役割を果たすことが一層求められています。引き続き、関係の機関・団体と緊密に連携し、被害に遭われた方やそのご家族、ご遺族に寄り添いながら努力を続ける決意を新たにしています。当センターにご支援いただいている企業や団体・個人の皆さんには心からお礼申し上げますとともに、きょうの「週間行事」を契機として支援のきずなが一層大きく広がるよう祈念します。



四十物 直之 理事長

次第

第1部

開会挨拶 理事長 四十物直之

来賓祝辞 富山県警察本部 警務部長 成富則宏 氏

「命の大切さを学ぶ教室」作文コンクール 表彰・朗読

第2部

基調講演 入江 杏 氏

上智大学グリーフケア研究所非常勤講師

第3部

コンサート 富山市立芝園中学校 吹奏楽研修部

閉会挨拶 とやま被害者支援センター

事務局長 奥井博義

来賓祝辞

犯罪被害者となられた方々が一日でも早く立ち直り、再び平穏な生活を営むことができるようになるためには、関係機関・団体の皆さまや地域の方々のご理解とご支援が必要不可欠です。県警察といたとしても、犯罪被害者を支援する皆さまとしっかりと連携し、被害者に寄り添い、被害者のニーズに即したきめ細やかな支援を推進してまいりたいと考えています。



成富 則宏 警務部長

「命の大切さを学ぶ教室」作文コンクール表彰・朗読

当センターと富山県警察本部は、県内の中・高校生を対象に「命の大切さを学ぶ教室」を開催しています。その教室で悪質な交通事故の被害で亡くなつた方のご遺族から聞いた話の感想を綴った作文コンクールの成績優秀者表彰式と最優秀作品の朗読が行われました。平成30年は17校で教室が開かれ、2200編の作文が寄せられました。

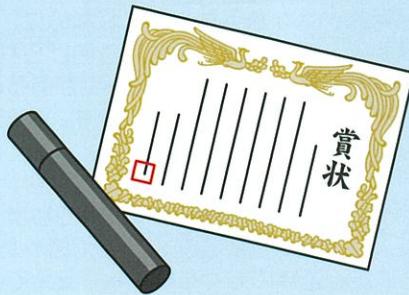
作文コンクール入賞者

中学校の部			
区分	学校名	氏名	作品名
最優秀賞	富山市立山室中学校2年	え 江 本 あかり	いつだれが被害にあうかわからない
優秀賞	富山市立芝園中学校2年	まつ 松 村 音 羽	(講演を聞いて)
優秀賞	高岡市立高陵中学校2年	おり 折 橋 百 音	「交通事故を防ぐために」
佳作	射水市立大門中学校2年	ほん 本 名 ほのか	
佳作	富山市立和合中学校2年	おお 田 雄 すけ 介	命の大切さ

高校の部			
区分	学校名	氏名	作品名
最優秀賞	富山県立呉羽高校1年	たに 谷 井 瑠 茉	「何ごともなかつたように」
優秀賞	富山県立呉羽高校1年	ゆずりは 杠 ののか 野々香	祖父から学んだ命の大切さ
優秀賞	富山県立高岡工芸高校2年	なか 中 野 秀 瞭	命を守る
優秀賞	高岡第一高校1年	せき 関 戸 瑠 璃	「事故」の深さ
佳作	富山県立小杉高校1年	たけ 竹 林 界 都	



表彰された成績優秀者のみなさん



「いつだれが被害にあうかわからない」 富山市立山室中学2年 江本 あかり

「いつ誰が被害に遭うかわからない。」これは、交通事故で家族が被害に遭った方から聞いた言葉です。

その話の中でとても印象に残っていることが三つあります。

一つめは、ルールを守ることの大切さです。しかし、私一人がルールを守っていても、交通事故は減りません。だからこそ全ての人が意識して、正しくルールを守って生活することが大切です。ルールを守ることで、私達自身が守られているのです。

二つめは、反省することの大切さです。今回の話は、加害者が一方的に悪く、二人の少年少女の命を奪ったというケースでした。それなのに、加害者は反省の素振りすら見せず、罪や被害者に向き合おうとしなかったそうです。そんな話を聞き、このようなことが本当にあるのだと驚きました。悪いことをしても認めず、反省せず、謝罪もしない人の姿を見て、こんな人間になってはいけないと思いました。謝るべきときだと思ったら、謙虚に謝ることのできる人間でありたいと思います。

三つめは、失われた命は二度と戻らないのだということです。被害者の遺族の方は、家族の希望だった子どもを一瞬で奪われてしまいました。このことを自分の家族に置き換えると、とても苦しい気持ちになります。これからの未来を幸せに思い描いていたのに、事故によって永久に失われてしまったのです。命は決してもとには戻りません。この事実の重みを十分に理解し、自分自身や周りの人の命を大切に思いながら生活していきたいと思います。

幸せの象徴とも言える希望にあふれた家庭を「事故」は簡単に壊してしまうのだと改めて分かりました。被害者の遺族の方は、きっとこれからも辛い思いを抱きながら生きていかれるのだろうと思います。私は、このような思いを抱いて生活をしている方々がいるのだということを忘れずに生きていきたいと思いました。また、そんな方々の支えになれるような大人になりたいと強く感じました。

いつ、誰が被害に遭うかわかりません。その時に温かな手を貸してあげられる人、誰の命をも大切にする人であります。と考えさせられました。



「何ごともなかつたように」

富山県立吳羽高等学校1年 谷井 瑞茉



毎日のように、日本のどこかで、事故や事件は起こっている。そんなニュースを見ながら、「可哀想だな」「大変だな」とは思うものの、講演会を聞くまでは、遺族の方の気持ちを真剣に考えたことはなかった。

講師の先生は、数年前に交通事故で最愛のご主人を亡くされた方だった。先生の口調、そして目を潤ませながらお話ししている姿に、何年経っても消えることのない、深い悲しみと苦しみを感じた。

高校の入学式から三日後、私は一つのタイムラインに目をとめた。それは、中学校の時の友人が投稿したもので、「心配かけてごめんなさい。」というコメントに、お医者さんの絵が添えられていた。その時、大変なことになっているとは知らずに、「大丈夫？」と私はラインで尋ねた。すると、「車にひかれて入院しとる。」と返信がきた。その時も、すぐに退院できる程度だと私は思っていた。しかし、実際は違った。ラインで会話しているうちに、私はどんどん心配になって、後日お見舞いに行った。そこには、顔や足にひどい傷を負った友人の姿があった。その友人は強がりで、立つこともできないくらいの怪我なのに、痛い顔ひとつ見せずに事故について語ってくれた。

その時、友人は自転車に乗っていた。そして、インターチェンジから出てきた車と勢いよくぶつかったそうだ。太ももの上をタイヤが通り、約二十メートルも引きずられたという。私の想像を遥かに越えるひどい事故だった。幸いなことに友人は、骨折をすることはなく、後遺症が残ることもなかった。医者には、「大事に至っていてもおかしくなかった。奇跡だ。」とまで言われたそうだ。結局、友人は三週間後に退院することができた。

この出来事は、「事故や事件なんて他人事だ」と思っていた私にとって、とても衝撃が大きかった。また、日常の中に非日常的なことは突然訪れると痛感させられた。

「何ごともなかつたように」、これは私が講演会で最も印象に残っている言葉だ。この言葉には二つの意味がある。

一つ目は、遺族の方についてのことだ。遺族の方々は、生きるために、生活をしていくために、何ごともなかつたように振る舞っているそうだ。この言葉を聞いて胸が痛くなった。いくら辛く悲しいからといって、何もしなかったら、生きていくことはできない。だからこそ、何ごともなかつたように必死に生きているように感じられた。

二つ目は、加害者についてのことだ。この事故の加害者は、最後まで謝らなかつたそうだ。結局、その加害者には執行猶予が付いただけだったため、今もどこかで何ごともなかつたように暮らしているのだろう。

同じ「何ごともなかつたように」なのに、こんなにも違うことに、加害者に対しての怒りがこみ上げた。そして、それと同時に、遺族の方に何もしてあげられない自分の無力さに落胆した。遺族の方とどう向き合っていくか、社会としてどう支えていくかを考える必要があると感じた。

私は今でも、あの日の事を思い出す。傷だらけの顔で事故について語ってくれた友人の事。大切な友を失いかけたという恐怖に怯え涙した夜を。

わたしは、講師の先生や友人の話を聞き、「生きること」と「死ぬこと」は紙一重だと感じた。命は重い。命は尊い。けれどもその割に簡単になくなってしまうものだ。非日常的なことは不意に訪れる。だからこそ、今この瞬間を、家族や友人と笑顔で過ごしたいと強く思った。そして、事故や事件などで命を落とす人が少なくなることを強く願っている。また、遺族の方々をみんなで支えていく、そんな社会をつくっていきたいと思った。

第2部

講演「悲しみを生きる力に～被害者遺族からあなたへ」

上智大学グリーフケア研究所 非常勤講師

世田谷区グリーフサポート検討委員

「ミシュカの森」主宰、「えんじにあす」代表取締役

入江 杏 氏



物語を生きる

今、私が携わっているグリーフ（悲嘆）ケアは、限りなく自分の物語を見つめることに通じます。誰でも人生の物語を生きており、それはその人の生きる核であり、尊厳の源です。ですから、他人の言動によって傷つくということは核が否定されることになります。それらの物語を深く見つめることによって、悲しみを生きる力に変えるヒントになるのではないかと思っています。

突然の喪失に伴う悲しみは、生命を失うことだけではありません。失職、離婚などのほか子どもの場合は転校も含まれます。グリーフケアの立場からいくつかのキーワードを挙げるならば、「サバイバーズ・ギルト」つまり事件・事故で自分だけが生き残ったという遺族の罪悪感や、いじめや自死といった悲しみとして周囲が『公認、してくれない「ディスエンフランチャイズド・グリーフ」、いつまで犯罪被害者と声高に言われる「スティグマ（らく印）」などがあります。

「環状島」とは

悲しい体験をするとトラウマを抱えると言われます。精神科医の宮地尚子さんはトラウマを抱えた人と、その人を取り囲む人間関係を「環状島」というモデルで説明しています。環状島には中心部に「内海」があり、それを取り囲むようにして「尾根」の山々がそびえ、尾根を外側に越えると広々とした「外海」が広がっています。尾根に通じる外斜面と内斜面があり、トラウマを抱えた被害者は内斜面を上り、その人に手を差し伸べようとする支援者は外斜面にいるという構図です。

尾根には悲しみやトラウマに伴う激しい暴風が吹き荒れています。尾根に向かってはい上がるとする犠牲者や遺族、支援者、そして傍観者などさまざまな立ち位置の人がいて尾根にたどり着けないこともあるのです。最初からそれぞれの立場を理解すればグリーフケアにつながることもできるはずです。私のような体験をした人間にはこの「環状島」の考え方方が心に響きます。

事件について

18年前の事件に触れたいと思います。私の家と隣り合わせだった妹家族の家はできるだけお互いの生活を邪魔しないよう防音装置が施されていました。そのため、妹家族が襲われたとき声が届かず助けられなかっただという「サバイバーズ・ギルト」に悩まされました。事件発覚当日の朝、孫たちが顔を見せないことを不審に思った母が「殺されている」と駆け込んできた時、何が起こったのかすぐにはわかりませんでした。悲惨な事件現場を見るなという夫の指示に従ったこともあります。警察の捜査員の質問攻めに追われてあわただしく、妹たちとの『正式な別れ』はできませんでした。葬儀も警察の捜査の都合などで家の宗派とは違う寺院で営むことになって不本意でした。母は悲しみの中で「(事件を)誰にも知られたくない」「恥ずかしいから外に出ない」といった態度になり、「スティグマ」との葛藤に苦しみながら後に亡くなりました。

絵とつながる

妹の長女、にいなちゃん（当時8歳）と最後に会ったのは事件発覚前日でした。その時、にいなちゃんは大掃除のためかわいい赤いバンダナ姿でした。

それは、葬儀の後に小学校から返してもらった童話「スホの白い馬」を読んだ感想としてにいなちゃんが描いた絵の少女像とそっくりだったのです。なぜこのような絵を残したのか。私は現在、絵本の読み聞かせなどをする「ミシュカの森」活動に携わっています。絵を通じてにいなちゃんとはずっとつながっていると感じています。事件の解決を祈念してやみません。



第3部

芝園中学校吹奏楽研修部によるコンサート

コンサートでは芝園中学校吹奏楽研修部員1、2年生が登壇し3曲を披露しました。行進曲「空のエース」は軽快なテンポで会場を盛り上げ、ディスコビート調のヒット曲「君の瞳に恋してる」は聴衆が手拍子で演奏に参加しました。そしてアニメ・エヴァンゲリオンのテーマ曲「残酷な天使のテーゼ」を力強く響かせました。演奏の合間にはそれぞれ部員が曲を紹介する場面もありました。



軽快で力強い演奏が会場いっぱいに響いた

アンケート結果報告

会場にて、62人の来場者の方々より被害者支援に対するアンケートをいただきました。お忙しい中、ご協力に感謝申し上げます。

<来場者からのアンケート結果>

1.ア性別・イ年代・ウ職業

- ア. 男性 34人 女性28人
イ. 年代 10代…2 20代…7 30代…8 40代…14 50代…18 60代…6 70代…1 不明…6

2.この催しを何で知りましたか？

- ア. ポスター…6 イ. 関係機関・所属団体から…45 ウ. その他…10 不明…1

3.「とやま被害者支援センター」という団体名を聞いたことがありますか？

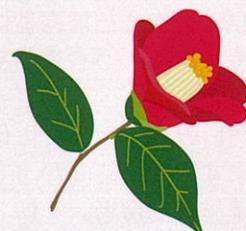
- ア. ある…48 イ. ない…14

4.当センターがどんな活動をしているか知っていますか？

- ア. 知っている…39 イ. 知らない…22 ウ. 不明…1

5.当センターの活動に関する「ご意見・ご感想」(抜粋)

- ・良いイベントだと思います。継続して欲しい。
- ・定期的に開催して欲しい。
- ・学校を対象とした講演を行って欲しい。
- ・まだ活動を知らない人がいるのでは。
- ・センターを利用したことのある方の感想などを広報してほしい。



6. 本日の行事に参加してのご感想

- ・中・高生の作文のレベルの高さに感動しました。
- ・朗読で心が洗われた。
- ・犯罪被害者支援について、一人ひとりができるることを考えさせられました。
- ・寄り添っていく支援の大切さを学びました。
- ・このイベントを通して、犯罪被害のことを深く考えてみたいと思った。
- ・実際に犯罪被害に遭われた方のお話を聞いて視点が変わった。
- ・平穏な生活を送ってきたので、胸が苦しくなった。でも、聞いて良かった。
- ・自分が思っていたのとは、実際にお話を聞くと違っていたので、接し方の難しさを知りました。
- ・被害者の方が、言われて救われる言葉・つらい言葉を知ることができて、良かった。聴き役に徹する重要性を知った。
- ・中学生の演奏がとてもよかったです。

活動報告

平成30年9月～12月

● センター主催研修会

継続研修

9月18日 「被害者遺族とグリーフケア」

大和田撮子先生 神戸松蔭女子学院大学 教授

10月16日 「電話相談から直接支援に繋ぐ」

林 貴子先生 NNVS認定コーディネーター・ぎふ被害者支援センター



参加者の声

「何を聞こうか」より「どんな気持ちで聽こうか」が大切であり、相手に寄り添いながら、言葉の使い方に注意することをあらためて学びました。

裁判傍聴

12月10日～13日 裁判員裁判

● 事例検討会

9月7日、11月9日、

大久保恵美子先生 (公社)全国被害者支援ネットワーク顧問・当センター理事

● 県外研修

- 全国被害者支援フォーラム2018(東京) 5名参加
- 平成30年度秋期全国研修会(東京) 9名参加
- 自助グループ研修会(東京) 1名参加
- 少年犯罪被害当事者の会 研修会(大阪) 1名参加
- 交通事故被害者サポートシンポジウム(仙台) 1名参加



● 週間行事

12月1日 タワー111にて「講演会＆コンサート」

(当日の様子はHPにも掲載)

講演活動 「命の大切さを学ぶ教室」

11月9日 志貴野高等学校

11月16日 高岡市立福岡小学校PTA

支援員を募集します

(2019年4月から予定)

犯罪被害者支援活動にご協力いただける方を募集します。

詳細は当センター事務局までご連絡ください。☎076-413-7820

広報・啓発活動

市町村巡回パネル展

8月20日～24日	富山市	8月27日～31日	舟橋村	9月3日～7日	射水市
9月10日～14日	魚津市	9月18日～14日	滑川市	9月25日～28日	小矢部市
10月1日～5日	氷見市	10月22日～26日	立山町	11月5日～9日	朝日町
11月12日～16日	入善町	11月19日～22日	黒部市	11月26日～30日	砺波市
12月3日～7日	上市町	12月10日～14日	南砺市	1月21日～25日	高岡市(予定)



砺波市役所会場



入善町SCコスモ21会場



上市町つるぎふれあい館会場

※各会場の様子はホームページにも掲載

県内各種大会での広報活動

- 10月11日 富山県安全なまちづくり推進大会
- 全国地域安全運動 富山県民大会
- 11月15日 暴力追放 富山県民大会



「全国地域安全運動 富山県民大会」での広報活動

啓発のための講師派遣

- 10月16日 保護観察所
- 10月16日 富山県警察学校被害者支援専科
- 11月 6日 南砺市被害者支援ネットワーク総会

その他広報活動

(犯罪被害者週間行事の一環として)

県内各警察署への広報物配布
富山市内、小中学校への広報

市町村広報誌への掲載 (高岡市・黒部市・滑川市・氷見市・南砺市・上市町・小矢部市)



11月26日 富山駅にて「犯罪被害者週間広報キャンペーン」

自助グループ

- 9月22日
- 10月19日
- 12月21日

編集後記

12月1日(土)、当センター主催「講演会&コンサート」を開催しました。ご多用の中、ご来場いただいた皆様に、心からお礼と感謝を申し上げます。

「講演会」では、被害者ご遺族のお声を通じて、理不尽な形で最愛のご家族を奪われた悲しみ、苦しみを思い知り、悲惨な犯罪や事故が起きない社会であって欲しいと強く願い、あらためて被害者支援活動の大切さを感じました。

なお、多くの県民の皆様にもっと参加して頂きたく、開催の曜日、時間、場所、構成等について、アンケートでのご意見を参考に検討してまいります。

公益社団法人

とやま被害者支援センターだより 第29号

平成30年12月27日発行

発行／富山県公安委員会指定犯罪被害者等早期援助団体

公益社団法人とやま被害者支援センター

責任者／事務局長 奥井 博義

事務局／〒930-0858 富山市牛島町5番7号

TEL : 076-413-7820 FAX : 076-471-7825

E-mail / jimukyoku@toyama-shien.com

ホームページ / http://www.toyama-shien.com

相談電話 / 076-413-7830

